

# Hockett の言語観

興津達朗

## Hockett's View of Language

Tatsuro OKITSU

### まえがき

この小論は C.F. Hockett, “Where the tongue slips, there slip I” (1967<sup>1)</sup>) の分析と解説とを通して、Hockett の言語観を探究しようとするものである。Hockett のこの論文にとくに注目するのは次のような考え方による。(1) Hockett は Chomsky 同様、先行したアメリカ構造言語学(とくに、新ブルームフィールド学派)の基盤をなす諸原理(その一つは「分布」)にかわる新しい言語学の理論、方法を摸索しており、その基本方向において両者は一致する所が多い(2)しかし、同時に両者間には著るしい相違点があり、それぞれの言語理論を理解するためには、その対称点の解明がきわめて重要になる(3)言いかえると、アメリカ構造言語学の物理主義(physicalism)にかわる心理主義(mentalism)、言語構造にかわる言語機能を重視する点で、両者は共通しているが、問題は言語分析の方法論およびその基底機構(underlying mechanism)をいかに設定するかである(4)小論では(a)まず、Hockett の心理的方法論の基盤をなす三つの作用、すなわち混成、編集および類推を提示、説明し(b)三者間の関連性に言及し(c)この心的分析の結果到達した基底機構を Chomsky のそれと比較、検討してみることにする。

### 混成 (Blending)

Hockett の関心が言語の規則性よりは変則性に、とくに「言い誤り」(slip of the tongue)に、言語の構造よりはその機能、生成に転換したのは、一つには上述したようにアメリカ構造言語学に対する反省、反動でもあるが、もう一つ、本論文作成の直接的原因は彼が Sigmund Freud (1856–1939) の異常心理学につよい影響を受けたからである。<sup>2)</sup> 言語の機能、生成は正常な言語現象の中に観察されるよりは、その異常性においてより明確に反映され、したがって検証できるとみられるからである。<sup>3)</sup> この視点から Hockett は従来、むしろ例外として軽視され、無視されてきた混成を始めとする編集、類推などの諸作用に、分析のスポットライトをあてようとする。

一般に混成(語句)とは、たとえば *sm-oke + f-og > smog*, *br-eakfast + l-unch > brunch*, *sl-im + t-ender > slender*, *these things + this kind of things > these kind of things*<sup>4)</sup> などのような特殊な語(句)形成をさすが、Hockett はここでは、特定の場面(situation)<sup>5)</sup>における特定の言語活動によって生成される文中の混成語に注目している。

#### [例1]

場面：父親は子供たちがかん高い声でさわぐのにいらいらしている。

発話：Dont't shell so loud! (そんな大声を出すんじゃないよ)。

この文中の *shell* が混成語である。このような場面で発せられやすい語として、*shout*, *yell* があるが、いらいらのあまり、おもわず (*sh-out + y-ell* > *shell*) となったまでである。音声学的分析によれば、単音節語 (CVC) において、この場合 *shell* の外に次の五つの混成可能語がある：*yout* (<*y-ell + sh-out*), *yet* (<*ye-ll + shou-t*), *shoul* (<*shou-t + ye-ll*), *shet* (<*sh-ou-t + y-e-ll*), *youl* (<*y-e-ll + sh-ou-t*)。しかし、実際にはこの中から二語だけが選択される。それは音声学的分析よりも、英語固有の音節構造が優先するからである。英語の音節区分法によれば、単音節語は CVC ではなく、C (VC) の二つの直接構成素から成立しているからである。たとえば、*shout* (*sh-out* (C (VC))) および *yell* (*y-ell* (C (VC))) の音節的分析から混成される語は、*shell* と *yout* だけで、上掲の他の混成語は排除されてしまう。さらにこの両語を比較してみると、前者には既存語 *shell* (「貝」を意味する) の形態的な支持 (favoritism) があるが、同じ混成語でも *yout* にはそれがない。さらにまた、混成語 *shell* (「さわぎたてる」) は意味的にも既存語 *shell* (詩語として「外耳」、または「砲撃」と子供がさわぎたてるというこの特定場面において連想的に結びつきやすい。以上、われわれは混成語の生成においては、音的、形態的、意味的、場面的な諸環境が大いに関与することをみてきたのであり、この点では次例も同じである。

#### 編集 (Editing)

##### [例 2]

場面：妻が珍らしく、新居のまわりに芝生を植え込もうと一生懸命。主人は他人にこのことについて話している。

発話：She's anxious to get a yawn? — yard in. (家内は芝生を植えようと懸命なんですよ)。

この文にはとくに、声門閉鎖 (glottal cutoff) および休止 (pause) を表わす記号が使われており、言語活動の場面的特徴をより正確に表示しているが、これがいわゆる「パラ言語」(paralanguage) である。<sup>6)</sup> 例 1 に比べて、この例は「混成語 + α」の形式をとっており、前半は例 1 と同じである。生成された混成語としては *yawn* (<*y-ard + l-awn*) の外に *lard* (<*l-awn + y-ard*) があるが、それらの二つの原形、*yard* および *lawn* では、*yard* (= [イギリス英語] *garden*) には、芝の有無、いずれの場合が含まれるから *lawn* の方が無難である。音声学的には、混成語としての *yawn* と *lard* とに優劣はないが、例 1 の場合同様、前者は既存語 *yawn* (「あくびをする」) と同形で、後者に比べて自立性がつよい。この発話が混成語を生成した原因としては、あまりよく知らない他人との会話において、本人が「気づかい」を感じすぎていること、または自分の話すことが相手につまらないことと思われはしないかの懸念が働いたためとみられる。

この発話には第二の特徴として、「+ α」にあたる部分、すなわち顕在的訂正 (overt correction) または編集が含まれている。話者は *yawn* が言い誤りと気づき、ただちに訂正をこころみる (このあわてぶりが、声門閉鎖 + 休止の表記であらわされている)。その結果、正形としての *lawn* のかわりに *yard* を持ち出す。あわてたため、混成語を生成し、そのあと訂正語を間違えるという二重の言い誤りをおかしたのである。さらにこういう場面においてはとくに連想が働きやすく、慣用語 *yawn* の深層には、She's so anxious to get a yawn [get laid]. (彼女はしきりにあくびをしたがっている [ねたがっている]) にはある種の性的含意 (sexual

allusion) がある。この含意を打ち消そうと、あわてて代用語を持ち出したのだが、この点では yard のかわりに lawn でも、混成語の lard でも、この悪印象を打ち消す効果はない。もちろん、一番いいのは始めから *She's so anxious to get a lawn (yard) in.* と発話することで、これならば文と場面が直結するため性的含意は表面化しない。われわれは混成、編集など言語生成の変則的なアスペクト（言い誤り）を通して、特定場面において発話が行われるときにはそれが音的環境、形態的環境、語義の連想的慣用法などと深いかわりをもつことをみてきたのである。

### その他の諸作用：同化 (Assimilation)

言語生成の特殊的なアスペクトとしては、この外いろいろの作用があげられるが、ここではその中の一つとして同化を付加しておく。

#### [例3]

場面：テレビの司会者が煙草のコマーシャル宣伝をしている。

発話：The question is, how can you tell one sil? — filter cigarette from another these days? (今日の問題は、いかにしてシル — フィルターつきシガレットのよしあしを見分けるかである)。

この例も前例2と同じく「混成語+α」で表示できる（パラ言語としての表記も、まったく同じである）。この場合、sil は完成すれば混成語 *silter* (<ci-garette + fi-*lter*) を生成する筈であるが、ここではそれ自身、完成語ではなく語の一部をなすにすぎない。このように中断したため、後続の訂正もあまり目立たないで、sil の言い誤りにも気づかれないほどである。ただ Hockett によれば、司会者が *one silter cigarette from another* とも *one silter? — filter cigarette from another* とも言わないで、例3のように sil? で中断しているのは、彼の中に sil — silly (「ばかばかしい」) の連想が働いているためで、ここには司会者のこのコマーシャルに対する批判がうかがわれるとしている。

次に注目すべき点は、例1、例2が会話体であったのに対して、例3はアナウンサーが書かれた原稿を読んでいることである。読むとは、Hockett によれば発音器官による表出 (delivery) とこれに先行する（おそらく心的聴覚をとまなうが）通視 (scanning) との二重作業であり、後者によってまず適切な語強勢、文強勢、音調、休止などの音的情報が準備され、これが前者に伝えられ、実現するのである。この事実を例によって示すことにする。

#### [例4]

After John had started the car . . . . (a) Mary jumped in.  
(b) pulled up to the curb.

この例において、後続部のちがい ((a), (b)) によって通視は二つの異なった解釈をこころみ、その結果前半部の表出は、次に示すように音調（上昇調）、休止がそれぞれ異なった位置におかれることによって実現する。

After John had started the car, / (a)  
After John had started, / the car (b)

実際には、これらの「かぶせ音素」(suprasegmental phoneme) の分布を間違えることがあり(たとえば(a)と(b)とを入れ換えてしまう), このため言い誤りが生じるのである。

例3の「+ α」に相当する部分の分析として、「同化」をあげることができる。一般に同化とは、たとえば cupboard において p は隣接音 b のために b と同化することであり、例3の場合も fi-ter の fi が後続の ci-garette の ci に同化されて、si (l) になったとみられる。例4も、見方によれば読みの作業において後続の文脈が先行の部分に影響をおよぼしているのであり、この点に注目すれば、両者間には共通性がある。また読みの作業においては前述の部分の後述部分に影響することもある。その一例を次に示す。

[例5]

Those of your advisors who wished to throw us into the Garden of Clinging Vines must twine? — must step within this circle of light. ((つたのようにからまる—いや、寄りそう—)「女の園」に引き入れようと御忠告なされたみなさん、まず(御自身が)この光の輪の中に入らなければなりません)

この文例では、ここにまったく書かれていない must twine の二語が二頁前には Twining Vines と出ていたため、これを思い出しこれと関連つけて、読む場合に思わず混入したものと見られる(ここでも声門閉鎖+休止が注目される)。

以上、同化およびこれに関連して読みの作業を扱ってきたが、この種の言語作用についてはその原因を表層としての音声環境、文環境(文脈)の中に発見し、関連づけることができる。この点において混成および編集とは異なる。後者もやはり表層に実現されるが、その選択の原点は潜在的な連想にのみ求められる。Saussure のことばを借りるならば、混成および編集は「連合」(associative) 次元に始まるのに対して、同化(および読み)は「統合」(syntagmatic) 次元で行われると言えよう。

### 類 推 (Analogy)

混成、編集の原点は連合的、同化は統合的と異なるが、三者とも線条性(linearity)すなわち表層と直結しているのに対して、次に述べる類推(これは一般に比例式:  $a : b = c : X$  で表示されるが)は二段階的な、間接的生成とでも言えよう。既知の関係( $a : b$ )のもつ「形成的圧力」(configurational pressure)<sup>7)</sup>のもとに、新関係( $c : X$ )を生成させる方法であり、この新しい枠組みは前述のものとは異質的で、かつ任意の既知項の対立を選択し得る点において、生成力はより強力である。Hockett のあげている例を示すことにする。

[例6]

場面: 黒人の子供が熱帯地方の暑い室内であえいでいる。

発話: It's three hot in here!<sup>8)</sup> (ここは三倍暑いやあ!)

Hockett は類推比例式を活用して、この変則的表現、言い誤りの生成過程を次のように説明している。

I'd like two pieces           : I'd like three pieces           =  
We waited two minutes       : We waited three minutes       =

Give me two hot ones : Give me three hot ones =  
 ..... : ..... =  
 It's too hot in here : X

[例7]

場面：父の書斎に入ろうとすると、いつも「邪魔しちゃだめ」とやられる子供があるとき  
 仕返しをする。

発話：You're interrerring up! (あんたこそ邪魔してるよ!)

この場合、周囲の騒音のため子供には interrupt の最後の t がきこえなかったし (よく t 音はきこえない), r と最後の母音 (u で表わされる) との間に接続 (juncture) はないのだが、あったようにきこえた。この言い誤りの生成過程は次のようである。

Don't wake up the baby : You're waking up the baby =  
 Don't burn up that paper : You're burning up that paper =  
 Don't sit up : You're sitting up =  
 ..... : ..... =  
 Don't interrup (t) : X

[例8]

表現：Ten pounds were weighed by the meat. (肉十ポンドが測定された)

この生成過程は次の通り。

John shot the tiger : The tiger was shot by John =  
 Bill read the book : The book was read by Bill =  
 The butcher weighed the meat : The meat was weighed by the butcher =  
 ..... : ..... =  
 The meat weighed ten pounds : X

最後の例で言い誤りまたは非文法的文の生成の原因がこの文中においてとくに weigh のもつ他動詞性、自動詞性 (± — NP) の判断のあいまいさによることは言うまでもない。

これらが Hockett のあげている類推の例であるが、それらを通して次のような補足的考察をすることができる。(1)三つの例は変則的な文(非文)の生成過程を示しているが、類推が本来規則的な文(適格文)を生成するものであることは Bloomfield の言明を待つまでもない。<sup>9)</sup> これらの上掲の変則的な例から拡大して、Hockett の所説は類推比例式が、適格文、非文を峻別することなく、ともに生成するということである。(2)例6, 例7は明らかに場面にもとづく類推による生成であるが、例8は場面から独立している。この例には Hockett の「もちろん、変形も類推である」との説明が加えられているが、ここには文の文法構造自体を重視する考え方(たとえば変形文法)に対して、文の生成における場면을優先させる Hockett の考え方がうかがわれる(3)類推比例式的前提をなすのは形態と意味との合体性または併行性である。形態の変更にはかならず意味の変更が呼応するという大前提は、アメリカ構造言語学から引き継がれたものである。<sup>10)</sup>

## 混成, 編集, 類推の関連化

以上, われわれは主として混成, 編集および類推の三者について, 個々に分析, 説明を進めてきたのであるが, ここでは三者の関連性について言及することにする。

### (1) 混成と類推

Hockett は両者の関係を論じるのに, 類推がその特性としてもっている「非両立性」(incompatibility) の原理を活用する。発話の実態をみるならば, 特定の場面においていくつかの類推がそれぞれの形式的圧力をもってひしめき合っているのであるが, 一般的にはそれらの中で一つだけが選択され, 他は排除されてしまい両立または共立はしないのである。たとえば, swimmied のように一つだけの類推比例式によって生成される (dream : dreamed = swim : X) ことが多い。しかし, ときには (幼児の場合, または大人が疲れているときなど), この非両立性の禁制がゆるめられて swammed が生成されることがある。これは, たとえば sigh : sighed = swim : X および sing : sang = swim : X の二つの比例式が同時に採用された結果であり, 同一の意味(「過去」)が二つの形態の合体, すなわち混成で表わされたものである。Hockett によれば, これまで述べてきた混成は, このように類推のもつ非両立性を無視した結果であり, 「不安定な類推」(conflicting analogy) と言うことになる。

なお, 前者の場合とは逆に, 非両立性をすべて抑制してしまったときには, 例 6, 例 7 でみたように, 二つの形態的相違は解消されて, あいまいになり, それぞれ次に示すように言い誤りを生じやすくなる。

	形態	音		形態	音
例 6	two too	} → /tu: /	例 7	inter up interrupt	} → /'ɪntərʌp(t) /

### (2) 類推の抽象化

類推比例式が任意の既知項目にもとづいて新しい生成を行うことについては前述したが, 問題はこの既知項目が任意であるかぎり, 話し手と聞き手との間において使用される項目がまったく同一ではないことがあることであり, 実際にはちがう場合の方が多いとみられる。このことは, 類推が現存するそっくりそのままの既知項目よりは, 同類, 同形の既知項目から抽象された一つの型 (pattern) にもとづいて行われることを意味する。Hockett は, われわれが幼時から長い間の言語活動によって, すでにこの類推の抽象化を高度化していることをみとめ, これを彼の作曲の経験と比べている。作曲においても「発展的構造化」(developmental structure) が行われ, 主題, 副題をどう配置するか, どんな変奏部を設けるか, 各楽章の構成, 関連をどうするか等々の構造化, 抽象化が使用する実際の音的資料の選択に先行するのである。Hockett はこの作曲の抽象化を Chomsky (1957) の「上位から下位への生成」(“top to bottom” generation)<sup>11)</sup>と対応させ, たとえば始めに NP — VP が決定し, そのあとで具体的な John, ran が選択されると述べている。重要なことは, 類推のこのような高度の抽象化にもかかわらず Hockett は, これに見合う新たな生成機構の設定の必要はないとしていることである。<sup>12)</sup>

### (3) 編集と類推

われわれは先に「混成 +  $\alpha$  (=編集)」という形式で編集という新概念を紹介し、かつ編集が混成とともに連合次元を原点として生成されることにも言及した (Cf. p.174). しかしここで扱った顕在的訂正、編集に対しては新たに潜在的訂正、編集 (covert editing) の存在が強調される。人開の言語活動は内面からみるならば、一種の自己生成的な (self-generating) 過程であり、この「言葉の内的流れ」(inner flow of speech) をわれわれは訂正も、省略もなく、できるだけ正確に「読みとる」のである。<sup>13)</sup> しかし実際には、この言葉の内的流れには言い誤りが介入しやすく、したがって、ここに潜在的訂正、編集の必要が生じる。正式のスピーチなどで言い誤りが少ないのは、これが顕在化する前にこの潜在的編集がたえず行われるからである。他方、自然の会話においては、このような内的抑制は働かないために言い誤りはそのまま表現されてしまうのである (Cf. p.172).

この潜在的編集と(2)で述べた類推の抽象化とを Hockett はいかに関連づけているのだろうか？ 両者とも言語活動の内部（現代言語学用語で言う深層に相当するが）の探究であり、同一方向をとっているかぎり Hockett は両者を同一視しようとしているのだろうか？ この点について彼の所説は明確ではなく、今後の研究課題である。彼の言語観の一つの特色はここに隠されているのかもしれない。なお Hockett が類推を一方では具体的な「場面」と直結させ、他方ではこのように抽象的な「思考」と関連づけていることは注目すべき点である。

### まとめ：Hockett と Chomsky

Chomsky は Hockett の類推研究に特別の関心をもち、次のように言っている。「現代言語学者の中で、Hockett は [類推についての] 問題が存在することに少くとも着目した例外的存在である」としている。この小論の始めにも言及したように、Chomsky と Hockett とはともに新しい言語研究の方向を摸索し、しかも同じ方向に進んでいることが注目される。しかし、Chomsky はさらに Hockett の類推研究について「Hockett は新しい生成を論じるのに、新しい言語表現は「脈絡」(context) と関連づけることによってのみ理解できると考えているようである。日常生活において、平凡でしかも多くは新生の発話文の意味を決定する「新」言語機構の構想にまで考えが及ばないのが現代言語学の一般的傾向である」(ibid., p. 82) と言っている。われわれが、この小論において混成、編集、類推を通して論述してきたのは、一言でいえばまさに Chomsky が指摘している Hockett の脈絡主義であったわけである。

Chomsky はさらに Hockett が設定している三つの言語機構について「大部分の構造言語学者は [Hockett を含んで] 新生の文は類推、混成および編集によって形成されると考えているが、これらの概念を定式化 (formalize) しようとする、いかに捉えがたい、あいまいなものにすぎないかわかるだろう」と言っている。言うまでもなく、Chomsky にとっては、定式化の技術は現代数学および論理学によって与えられ、これが変形文法として完成したわけである。<sup>16)</sup>

一方、Hockett も変形文法についての批判を怠ってはいない。<sup>17)</sup> 一例を示せば、変形文法の基盤をなす（「言語運用」(performance) に対する）「言語能力」(competence) について Hockett は次のように言っている。「現実の、多少とも誤りを生じやすい（人間の）言語活動の背後には、複雑微妙にして、しかも確然とした「言語能力」が存在すると仮定するのが現代の流行となっている。この能力こそ文の生成装置をなすものだが、その仕組みについては、今まで入手できるいかなる技術によってもその概要が捉えられるだけである。このような見方は言語学をことさら困難かつ難解なものにするだけである。したがって基底的な言語能力に関する事実を

実際に発見できるものがいたならば大成功と称すべきである。」<sup>18)</sup>

以上、引用によって論述してきたような両者間の研究法および言語観の相違、対立が一般に言われる Hockett の経験主義 (empiricism) に対する Chomsky の理性主義 (rationalism) と言うことであろう。ここでは、この大問題について詳説することはできないが、両者のちがいについては本論に論述してきた中にも明白である (たとえば、言語能力についての両者の見方のちがい<sup>19)</sup>、または類推、潜在的編集についての Hockett の経験主義的論述 (p.177) など)。

Hockett の経験主義的言語観を鮮明に示しているものとして、彼の論文の最後の部分を引用することによって、この小論の結論とすることにしよう。「以上われわれが述べてきた要因および機構 [混成, 編集, 類推] によって示された装置の外には、言語には一つも装置はない。言語の諸特徴を明示できるような正確かつ決定的な形式的体系 (たとえば変形文法——興津) を探求することはむだな骨折りにすぎない。なぜならば、言語はそのような組織体ではないし、それを反映したものでないからである。言語は Saussure が考えたように「すべてが張り合った」(où tout se tient) 組織体ではなく、むしろ Sapir の適切な表現に示されているように「すべての文法はもれる」(All grammars leak) のである」<sup>20)</sup>。Hockett の経験主義的言語観の背後には不可知論 (agnosticism) 的な哲学があることは言うまでもない。

#### 注

- 1) Hockett, C.F.: "Where the tongue slips, there slip I" *The view from language* 226 ~ 256, Athens: Univ. of Georgia Press (1977); *To honor Roman Jakobson* 910 ~ 937, The Hague: Mouton (1967)
- 2) Brill, A.A. (tr.): *Psychopathology of everyday life*, New York: New American Library (1958)
- 3) Hockett, C.F.: *A course in modern linguistics* 425, New York: Macmillan (1958)
- 4) Sweet, H.: *A new English grammar* 148, Oxford: Clarendon (1948)  
Sweet はここで新語 *blending* を紹介し、この最後の例をあげている。
- 5) 時枝誠記:『国語学原論』「言語の存在条件としての主体、場面および素材」38—56。東京: 岩波 (1948)。時枝の言語過程説、とくに「場面」についての考察は Hockett の所説とかかわる所が多い。将来の両者の比較論が課題である。
- 6) パラ言語は言語活動に平行しておこる場合と言語活動そのものの中に含まれる場合とがある。後者には、声の出し方、どら声、泣きじゃくり、鼻うた式、笑いしゃべりなどいろいろある。パラ言語を体系的に扱った最初のものに Sapir, H.L. Smith らがいる。
- 7) Hockett, C.F.: *The state of the art*, 94, The Hague, Mouton (1968)
- 8) Jespersen, O.: *Language* 122, London: Allen & Unwin (1922)
- 9) Bloomfield, L.: *Language* 275, New York: Holt (1933)
- 10) Bloomfield, L.: *Ibid.*, 144
- 11) Chomsky, N.: *Syntactic structures* 37, The Hague; Mouton (1957)
- 12) Hockett, C.F.: *The state of the art* 95
- 13) われわれは同化および読みの作業を論じたとき、表出に先行する通視について詳説したが (Cf. p. 173), Hockett 自身も、この心的な通視とここで論述している思考の読みとりすなわち、言語表現活動とを関連づけている (Hockett (1977) p.241)
- 14) Chomsky, N.: *Cartesian linguistics* 82, New York and London: Harper & Row (1966)
- 15) Mehta, V.: *John is easy to please* 49, Tokyo: Eichosha (1976)
- 16) Chomsky, N.: *Current issues in linguistic theory* 22, The Hague: Mouton (1964)



- 17) Hockett, C.F.: *The state of the art* (1968) この書全体が Chomsky 批判の古典書となっている.
- 18) Hockett, C.F.: (1967) 934, (1977) 254
- 19) Chomsky, N.: *Aspects of the theory of syntax* 4, 193-194, Massachusetts; M.I.T. (1965)
- 20) Hockett, C.F. (1968) 96, fn. 43 の終わりには, 次のような文がある.  
It is safer not to pretend that we know things about the brain that in fact we do not know. 彼とは反対に, Chomsky はこの未知なるものに, あくことなく挑戦する.